

人間 茂吉の 魅力

山 根 巴

人間茂吉にはいろいろの面があって、毀誉褒貶というのでなくむしろ、好悪の感情を人々に色濃く与えるところがあった。好きと嫌いととの間の幾つもの色分けが、茂吉その人の客観的評価となつて、その文学的価値もどうやら定位を与えられてきたようである。

こういう私の心懷をふり返ってみても、ときにはふるいつきたいほどの魅力を感じるし、ときにはまた堪えられぬほどの異質感を抱かざるを得ない場合もあって、いわゆる人間味なるものを茂吉において見ようとすると、捕捉したい複雑さを否定できないのである。奇妙に生々しいかと思ふと、抽象界へ昇華したパーソナリティとして受けとることにいつの間にか慣れてしまったようである。

斎藤茂吉その人は、一個の個人であるとともに、また一個の普遍的人格者となつてゐるらしい。

私は、伊藤左千夫のことば「理想的愛子」を思い出す（「正岡子規君」のなかで、子規と節との關係をこのようにとらえている）。正岡子規が長塚節を見る眼に二通りあり、一は固有名詞長塚節を名のるところの一個の弟子であり、一は観念の中で思い描いた、あるべき（ありたき）姿のお弟

子であった。節や左千夫のほうで子規をどのように見たかはわからない。必ずしも現実と理想にわけて考えることをしたかどうか、はっきりしたことは言えないように思われる。

ここに斎藤茂吉のお弟子があつて、茂吉に親昵しながら同様の二面を見、現実と観念をわけて考え、その二つながらに惹かれ、影響を受けるといふことがあつたとすれば、文学における人間關係・人間評価・人間超克のありようを模型のごとく設定することができるかもしれない。

私は幸か不幸か茂吉の直弟子ではない。幸ともとれるし不幸ともとれる。このような発言をしたくなるのも、標題に掲げた論題で一篇の仮設を成すべく余儀なくされていることを思うからである。

私としては、初心に還る思いでこのスタートに立ってみなければならなかつたのである。すなわち、ありきたりの人物論や作家論とは違ふところの「言っておかねばならない」言説なのであつて、かねて胸底を住みつ戻りつしていた内心の声でもあつた。

一つの文学研究を成すことには人それぞれの立場があろう。私においては、当面の課題たる斎藤茂吉研究が私の文学研究であり、また私の学問でもある。斎藤茂吉のことを考える、どのように考えるかというメトードの問題がそこにある。つづく第三の問題として、それを成すのは私であると

いうこと、逆な言い方をすれば、私がどういう方法で茂吉を考えるかということを一瞬といえども忘れてはならないのであったことをあらためて思いおこし、人間山根が人間斎藤に相對するその対し方を再認識する必要があると思うのである。

二

私としてはまず、過去の人である斎藤茂吉とのそもそもの出会いから考へなければなるまい。もしも茂吉の歌にそれほどのがなかったり、彼の万葉研究の中に大したものがあったということであるならば、さしたる魅力を感じなかったであろう。

私はやはり、歌人であり万葉学者である、言いかえれば万葉的近代歌人であった点に惹かれたのであった。

もののふの八十うち河の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも

(巻三・二六四 柿本人麿)

(前略)

この歌も、「あまぎかる夷の長道ゆ」の歌のやうに、直線的に伸々とした調べのものである。この歌の上の句は序詞で、現代歌人の作歌態度から行けば、寧ろ鑑賞の邪魔をするのだが、吾等はそれを邪魔と感ぜずに、一首全体の声調的效果として受納れねばならぬ。さうすれば豊潤で太い朗かな調べのうちに、同時に切実峻厳、且つ無限の哀韻を感得することが出来る。この哀韻は、「いさよふ波の行方知らずも」にこもつてあることを知るなら、上の句の形式的に過ぎない序詞は、却つて下の句の効果を助長せしめたと解釈することも出来るのである。この限り無き哀韻は、幾度も吟誦してはじめて心に伝はり来るもので、

平俗な理論で始末すべきものではない。

この哀韻は、近江旧都を過ぎた心境の余波だらうとも説かれてゐる。これは否定出来ない。なほこの哀韻は支那文学の影響、或は仏教観相の影響だらうとも云はれてゐる。人麿ぐらゐるな力量を有つ者になれば、その発達史も複雑で、支那文学も仏教も融けきつてゐるとも解釈出来るが、この歌の出来た時の人麿の態度は、自然への観入・随順であつただけである。その關係を前後混同して彼此云つたところで、所詮戯論に終はるので、理窟は幾何精しいやうでも、この歌から遊離した上の空の言辭といふことになるのである。或人はこの歌を空虚な歌として輕蔑するが、自分はやはり人麿一代の傑作の一つとして尊敬するものである。

(全集第三十六卷所収「万葉秀歌」)

およそ常凡の鑑賞者が言い得ないことを率直に吐露し、説得力のすばらしさは、いま読みなおしてみても類を絶していると言つてもいい。直観と推理と、情操と気魄と、弁証法的な強弁はむしろなめらかな獨特の論理を展開しているようにさえ思われる。

若かった私の心を惹きつけた数々の名歌が、その由来と根拠を確實にもつていた証拠も見られるやうで、その作歌魂と批評家精神とがこの上もなく尊く思ふことを言わねばならぬ。

なげかへばものみな暗しひんがしに出づる星さへあからなくに

(大2「おひろ」)

愁ひつつ去にし子ゆゑに藤のはな揺る光さへ悲しきものを

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

(同「死にたまふ母」)

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

(同前)

星のある夜ぞらのもとに赤々とほはそは母は燃えゆきにけり

(大2「死にたまふ母」)

たたかひは上海に起り居たりけり鳳仙花紅く散りゐたりけり

(同「七月二十三日」)

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

(同「一本道」)

草づたふ朝の螢よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ

(大3「朝の螢」)

ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂しく降りにけるかも

(同「時雨」)

ひさかたのしぐれふりくる空さびし土に下りたちて鴉は啼くも

(同前)

当時文壇の鬼才芥川竜之介ならずとも、文学の人生的意味を考える人ならば、また、文学が人生そのものであることを直観しうる人ならば、大正初年のあの時期において、かくのごとき密度、かくのごとき高貴性、そしてかくのごとき象徴性を形成し得たことに瞠目しないわけにはゆくまい。それは千万言を費やすよりも、形の短小さがかえって偉大であることの証左ともなり、おそらく永久にくつがえることのない評価ができあがったと私は言いたいのである。

折々に彼が成した連作は、一愛読者私の胸中において、濾過され撰択され再編成されて、別趣の連作となることさえ許されるらしかった。次元が違うのか、あるいは世界が違うのか、というよりもむしろそれは私なりの理解力で再編成するしかないのだが、霞の髓から天空を覗き見るように、そのためにかえって光暉をも漂わせて、格段の価値あるものとして映るの

であった。

小説なるジャンルを評価する点において、いささかも人後に落つるものでないことを自覚しつつ、如上のことを真実に思ったのである。そして、その思いはいまも変りがない。私は茂吉の歌人的素質の中に、素質として生みつけられていた万葉ぶりの何ものかを内包していたことを信じないわけにはいかない。でなければとうてい、右にあげたような代表作の一つ一つに息づいている、個性的にしてかつ没個性的、近代的にしてかつ古代的な色調と音調とを理解することができないであらう。

ある意味では、じつに針金のごとく線が細いし、そしてまたやさしいのである。それでいて同時的に太く逞しいところは、他に匹敵する人があらうとは思えない。

あえて言うならば、その師左千夫や節よりも、ましてや子規よりも、その他与謝野鉄幹・北原白秋等々よりもっと新しく近代的で、しかも同時に古く古代的であったと言いたいのである。不思議な調和を保ったこの不協和音については、いままし彼の人間論に説き及んだ後で触れるところがなければなるまい。

ここにはただ、彼が精力的に書きあげた「鴨山考」一篇を思いおこすだけにとどめて、数多くの人磨の発想の歌や、人磨をのりこえた古調の制作と歌語りを一々とりあげてすることは省略に付すことにしよう。

三

次に私が茂吉の中に見出でた偉大なるものは、彼の中にある深淵であり、洞窟であり、小さな生命などはたちまち吸いこんでしまいかねないような、不思議な精力であった。混沌・雄渾・森敲・幽邃・縹渺、その他あらゆる

無気味なものが魅惑的に惹きつけて離さない。

デモニッシュなものへの開眼が、日本の文学にいままでになかった大事なものを与えたことを考慮に入れるとき、どのような形容のことはを費やしてでも、文学の近代化をもたらした文学者の功績に脱帽しない人はあるまいと思うが、その、数多くあったとは思えない真の文学者の中に、わが斎藤茂吉がいたことについては、彼の中の西洋と東洋との関係、文化科学と自然科学との関係などに関する精緻な調査をした上で、結論的な言い方をしなければなるまい。

ここには、彼が情熱をこめて説きつづけた写生論——実相観入の論を一瞥してみることにしよう。

実相に観入して自然・自己一元の生を写す。これが短歌上の写生である。この実相は、西洋語で云へば、例へば *das Reale* ぐらいに取ればよい。現実の相などと碎いて云つてもいい。自然はロダンなどが生涯透つてそして力強く云つたあの意味でもいい。この自然の大体の意味を味ふのに和辻氏の文章が有益である。「私はここで自然の語を限定して置く必要を感じる。ここに用ひる自然は人生と対立せしめた意味の、或は精神・文化などに対立せしめた意味の哲学的用語ではない。むしろ生と同義にさへ解せらるる所のロダンが好んで用ふる所の人生自然全体を包括した、我々の対象の世界の名である。我々の省察の対象となる限それは吾々の感覚に訴へる総ての要素を含むと共に、またその奥に活躍してある生そのものをも含んである」かう和辻氏は云ふ。予の謂ふ意味の自然もそれでいい。「生」は造花不窮の生氣、天地万物生々の「生」で「いのち」の義である。「写」の字は東洋画論では細微の点にまでわたつて論じてゐるが、ここでは表現もしくは実現位でいい。是は芸術の一般論に過ぎない、さうしたら、何も写生といふ特別の

語を出さなくとも好いと難する人がゐるかも知れない。それはその通りで、写生の嫌な人は写生を云はなくもいい、ただ予には写生は極めて切実なのであつて、予は予の芸術の根本義を此の写生におかうといふのである。予には、写実主義・自然主義・表現主義・理想主義・象徴主義・未來派・内心要素の原理云々では、切実に響いて来ないといふのである。(全集第十四巻所収「短歌に於ける写生の説」)

一貫して彼の論は、創作にもあらわれ、評論にもあらわれている。「写生」の「生」は「生命」の「生」であるというとき、心ある人は誰しも、彼の言わんとする真義を理解するにちがいない。スケッチをスタディした島崎藤村に対し、平面描写を主張した田山花袋に対し、茂吉といえども表面的な対抗意識をもつてした論調ではあるまい。藤村のためにも花袋のためにも、その他もろもろの客観主義者たちのためにも、そしてまた本人の茂吉たちのためにも、そのことは言っておく必要がある。

近代文学におけるリアリズムの深い意味を、多くの韻文・散文の作家たちが、また評論家たちが、平俗に単純に受けとっていたとは、茂吉といえども思わなかつたであらう。

その彼が、あえて、実相観入などという観念論ともいえそうなテーゼをうち出したということは、深くほり下げた拠点と論法とを自信をもって世に伝えた、彼の意識した世のわからず屋どもにわからせようとして、だまっておれなかつたのであらう。

また新年号がまはつて来て、一区切として新しく事をはじめることになつた。今年には昨年(の)紀元二千六百年を了つて、第一年として踏出さうといふ意気込であるからして、この夜話でも何か大切なことを伝えたいとおもつてゐる。

大切なことといふのは、やはり「写生」といふことであつて、「写生」トイフコトハ、生ヲ写スコトデアル、生ハ即チいのちノ義デアル」といふことは、自分は幾たびも会員諸氏に話したから、もうそんな話には聞き飽きた。もはや陳腐で駄目だなどとおもふ会員諸氏も必ず居ることだらうとおもふが、しかしそれは大きな迷蒙であるから、年のはじめに、腹を極めようといふのならば、先づその迷蒙を棄てなければならぬ。

正岡子規先生が述懐せられたやうに、「十七字だと思つて馬鹿にしてをつた俳句も、なかなか我等の力には及ばんといふ事がわかつて来た」といふごとく、短歌のやうな小さい文芸でも、いよいよ実作に従つて見ると、奥には奥があつて、なかなか思ふやうに行かぬといふことを経験する。そのとき、其処でへたばつてしまふもの、或は短歌などはつまらんといつて空嘯いてしまふもの、さういふ種類の人々は論外であるが、少しでも短歌といふものに執著して、実作をつづけて行かうといふ人々なら、必ず煩悶の時に逢着するに相違ないのである。マンネリズムを自覚して、そこから何とか新しく動き出さうといふ人々ならば、必ずさういふ煩悶の状態を幾度も繰返すに相違ない。

そのときに當つて、最も容易に煩悶を救はして呉れるものは、「写生」といふことの覚悟であり、またその実行である。この事は幾らうるさがられても繰返していふつもりである。行詰まつたときの非力を救つてくれるものは、じつと堪へて二たび実相に見入り聴入りそして観相するよりほかに途は無い。(後略)

(全集第十三巻所収「童馬山房夜話」282「写生」八昭和十六年一月号「アララギ」収載▽傍線山根)

彼の眼にはただ本質だけが見えていた。心の眼にそれははつきりと見えていた。表面にきらついている小波や私語が邪魔になつてしかたがなかつた。自分は我慢ができて本質がそれを許さないと思つたのであるうか。いやしくも彼の本質に対し異義をさしはさみ、揶揄的言説を弄する者に対しては天誅を加える必要があると思つたのであるう、語氣鋭く論駁を加えることをやめなかつた。

その本心に沿ひうる者であれば、その方向さえあれば、伸びてゆく若い魂をうけいれることにおいて、彼はやぶさかではなかつた。と同時に、わが行手に影さす者は、梢であろうと草の葉であろうと、打ち払うのに彼はまたやぶさかではなかつた。野兎に一撃を加える獅子のごとく、どんな場合にも彼の語氣はすばらしかつた。

獅子を出し、また語氣のことに触れたが、かのドイツ観念哲学の雄であるニーチェの思想などが顧みられる必要があるう。

例えば次にあげる記録は、茂吉の中にある陽極と陰極、天国と地獄、というよりも、やはりあらみたま・にぎみたまの相克のすがたと見るべきかもしれない。

(前略)

昭和十一年、箱根強羅の別荘での作に、こんながある。

山なかに心かなしみてわが落す涙を舐むる獅子さへもなし

「暁紅」の中で、はじめて、これを見たとき、なんとも不審な思いをさせられた記憶がある。どうやら、ツアトクストラだな、ということにはわかつた。だが、そのさきがわからない。箱根山中で、どんなに心かなしんだとて、ここへ、ツアトクストラの獅子を引っぱり出すのは、なんとも解せない。茂吉が、むかしからニーチェに関心を寄せていることは、僕も知っていた。このときも、ニーチェの何か一冊携えて行

ただろうぐらいの見当はついた。茂吉には、ときたま、即興的で、ひょうきんな作がある。これもそれかと思つてみたものの、茂吉ともあろうものが、「わが落す涙」を歌うにしては、いかにも仰山で空疎にすぎる。ニ―チェも知らぬ歌人どもをおどかしてやれという青年客気では、まさかあるまい。(中略)

茂吉没後十二年、茂吉の秘め隠していた、三十近くも年令のちがう愛人永井ふさ子が、突如として、「小説中央公論」に、茂吉の「愛の書簡」を発表した。八十通という量にも驚いたが、内容に至っては、さらに驚かされた。昭和十一年七月二十五日付のに、こうある。

○拜啓二十四日午後四時消印のお手紙いただきました。○御手紙は鈴木様の名にして下さい。山口君でも来ると知れますから○朝からいうちから蝸が群鳴します。そのころ起きて机に向いますが茫然としています。また夜、入浴して闇の林中を見ます。そうすると恋しい人のかおが彷彿としてあらわれます。これが現実なら飛びつくでしょう。この悲しみをのぞくには恋人を憎まねばならないのです。ツアラツストラの洞窟の中で落す涙をば伴の獅子が舐めてくれます、私の場合はその獅子もいぬではありませんか、山中に心悲しみてわがおとす涙を舐むる獅子さへもなし○この夏の大体の御計画おしらせねがいます○香雲荘へのおたよりも、そろそろ止めねばなりませんぬか、恋しい憎い悲しいめちやくちやです。○諦念で諦念で諦念です。中央公論と短歌研究の歌作ろうとしています。獅子の歌は誰にも分らず、出してもいいでしょう。○御自愛ねがいます○箱根に来るまえ手紙二つ。箱根から一昨日一つ。きょうハガキ一つとこの手紙です。乞焼却

ツアラツストラの獅子の歌が、「恋しい憎い悲しいめちやくちや」の、

「諦念で諦念で諦念」の相聞であるとは、知るべくもない。だれが知ろうか。こうなると、私生活の伏せられた女人關係を洗いたてないことには、鑑賞はおろか、一首の意さえ判然としないことになる。(中央公論社「日本」の詩歌「8」斎藤茂吉」に収められた、白井吉見氏の解説「詩人の肖像」より引用)

四

ここに至って私は、人間茂吉の根底に到り着こうとしていて、そのこと自体に何の不合理も不思議も感じなくなっていることに気がつく。茂吉の持っている歌人的な相貌・学者的な素養、この二つの門をくぐることによって、人間茂吉の本殿へ詣り着こうとしているようである。

もちろんその中の本尊は、まだ私ごときにはよく見えなければ、少なくとも神や仏とも違ふところの人間の持つ偉大さを、こよなきあこがれの心をもって仰ぎ見る姿勢にいつの間になつて私であった。

その私の耳に聞えるものは、相も変らぬ彼の油っこいエネルギーな言説であり、同じことを繰り返しても飽きることを知らない言語的行動力のたくましさ、また新しい魅力をもって鳴りひびいてくるように思われてくるのである。

例えば左藤春夫をして言わしめた、彼の中にある矛盾的なものを、私は私の立場で見直して見なければならぬと思う。

我等が茂吉は都会人のやうな田舎者、もしくは田舎者のやうな都会人であつた。また結局それと同じやうな事を意味するのも知れないが、彼は自分には古代人のやうな近代人、もしくは甚だ近代的な古代人のやうな気がした。もつとすばりと云つてしまふなら、彼は思ひき

つてヤボなダンディ、深刻な好人物、洗練された野人であつたと思ふ。あの新鮮に健康な官覚と、その繊緻密な神経と、あの人なつこげな温さと、何ものをも見逃すまいと心構へした冷さ。そんなさまさまな対照的なものを何の不調和もなく一時に感じさせるのがその人柄であつた。

詩人と科学者が、あの頑丈なやうでめて感じやすさうな一身に同棲してゐたことが、自分に前述のやうなことを思はせたものか、それともさういふ複雑な性情が、彼を詩人で同時に科学者にしたのか。自分はそのどちらとも知らない。ともあれ、自分にとつては幾分の畏れとともに多くのなつかしきを感じさせる人であつた。（「短歌」昭和二十九年三月号八斎藤茂吉特輯V収載「斎藤茂吉の人及び文学」）

彼は誰よりも肉親を愛する点では世俗的な人であつた。縁というものを誰よりも大事にし、科学者だけが直観しうる偉大な平衡感覚——大調和の精神にそれは近かるう——を認め、それにすがり、ただ自己をひたすらに生かせばいいというふうに考へる人であつたらしい。彼の眼には音が聞え、耳には物が見えた。耳で見ることさえ彼にはできた。それはただ人間の生命力を、この世を貫く宇宙線と直結さすことのできる人だけに許されたことであるやもしれぬ。

そのように思わなければ、彼が口ぐせに言う「全力的」ということばも不可解であらうし、また、「自然・自己一元の生」ということも無意味とならう。

不思議に彼の場合は、客観に通じるほどの偉大なる主観をもち、あらゆる矛盾が、いわゆる矛盾的自己統一を果たすことになつて何のためらいもないかのように思える。

不協和音が、実はより大きな調和の要素となるように、壮大な宇宙的音楽の世界を彼は作つていたのであつたかもしれない。彼が情熱をこめて言った声調論・万葉調などは、彼の生命力がつかんでいた言語的音楽美からくるあらわれであつたかもしれない。

その大きな世界の中で、人間茂吉が占める位置は、そしてまたそれが動く行動は、ダイナミックでもあつたが、一面我々に親愛感を通わせるところ、人間味あふるものでもあつたのである。

(44・6・2)